

令和7年度
学校評価結果報告書
(年度末結果報告書)



京畿国際通商高校との交流 (朝鮮通信使)



修学旅行 (浅草寺)



保育実習 (延崎保育園内)



フロンティアⅡ全体発表会 (多目的ホール)

呉市立呉高等学校

令和7年度学校経営計画

令和6年度～8年度

| | | | | | | | |
|----|---|-----|----------|------|-------|-----|----|
| 校番 | 1 | 学校名 | 呉市立呉高等学校 | 校長氏名 | 廣本 幸紀 | 全日制 | 本校 |
|----|---|-----|----------|------|-------|-----|----|

1 教育目標

地域課題の解決に貢献し、持続可能な社会の担い手として新たな価値を創造する、心豊かでたくましい人材を育成する。

2 三つの方針

① 育成を目指す資質・能力に関する方針（グラデュエーション・ポリシー）

深い学びを実現するために、身に付けた知識・技能を活用できる。【知識・技能】【発信力】
 目標の実現に向け、課題を解決するために、不断の努力ができる。【思考力】【課題解決力】
 「自立」と「自尊」の精神で主体的に学び、他者と協働して社会貢献できる。
 【持続可能な社会への意識】

② 教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）

一人一人の進路選択に必要な教科・科目を主体的・効率的に学習できる。
 興味・関心のある分野の教科・科目を主体的に探究・表現する力を育成できる。
 進路実現に向けて主体的・協働的に学びをデザインできる。

③ 入学者の受入れに関する方針（アドミッション・ポリシー）

「高き夢をいだけ そして 君が夢みた君になれ」という本校のスローガンに共感し、学業はもとより、部活動や課外活動にも積極的に取り組むことのできる、主体的・協働的な学習者を受け入れる。

3 中期（3年間）経営目標及び行動計画等

| 中期(3年間)経営目標 | 評価指標 | 目標値 | 実績値 | |
|--|----------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|
| | | | 初年度 | 今年度 |
| 希望する進路の実現を可能にする確かな基礎学力を身に付けさせる。 | 第1志望達成率 | 85% | 81.5% | 84% |
| 総合学科の特色を生かした学びの広汎な展開により、課題発見・解決能力を高める。 | 身に付けさせたい力の伸長に対する自己評価 | 1年60% 2年70% 3年80% | 1年59% 2年71% 3年80% | 1年54% 2年79% 3年78% |
| 生徒の規範意識や社会性を高め、自立した社会人としての資質・能力を身に付けさせる。 | 規範意識に対する肯定的評価 | 95% | 99% | 99% |

【評価基準】

A: 目標を完全に達成した。 B: 目標を概ね達成した。 C: 目標をあまり達成できなかった。 D: 目標をまったく達成できなかった。

4 短期（本年度）経営目標及び行動計画等

| 中期（3年間）経営目標 | | | | | | | |
|-------------------------------------|--------------------------|------------------------------------|-------|----------|----|---|------|
| (1) 希望する進路の実現を可能にする確かな基礎学力を身に付けさせる。 | | | | | | | |
| 短期(本年度)経営目標 | 本年度行動計画 | 評価指標 | 目標 | 実績値 | 評価 | 理由 | 担当分掌 |
| 自律的学習習慣の確立 | 生徒手帳と学習時間調査による家庭学習の定着 | Classiの学習時間入力状況 | 95% | 86% | B | 1年84%, 2年90%, 3年83%で, 学年により差が出ている。 | 進路指導 |
| 基礎的・基本的な学習内容の定着と活用能力の向上 | 授業における基礎的・基本的な知識・技能の活用 | 第1志望進路に必要な偏差値基準を達成した生徒 | 1年30% | 4% 4名 | C | 4年制大学進学希望者95人中32人が志望を確定しておらず, 目標値設定ができていない。 | 進路指導 |
| | | | 2年60% | 2% 2名 | C | 4年制大学進学希望者102人中29人が志望未定。希望進路との偏差値差が大きい。(平均-10p) | |
| | | 定期考査または小テストの「知識・技能」の問題の正答率60%以上の生徒 | 70% | 51.1% | C | 目標値に達成していないため。 | 教務 |
| 希望進路の実現 | 組織的進路指導体制の構築 | 第1志望達成率 | 85% | 84% | A | 現在108人の生徒が第1志望で合格。 | 進路指導 |
| | 個別指導体制の強化 | 国公立大合格者数 | 12名 | 2名 | C | 国公立大学への出願12名。 | 進路指導 |
| 授業改善の積極的推進 | 発問の工夫・ICT機器の活用を取り入れた授業展開 | 授業アンケート最肯定の割合 | 70% | 72.4% | A | 1回目の71.3%からわずかではあるが数値が上がっているため。 | 教育研究 |
| | | 授業改善の研修や資料提供の回数 | 3回 | 3回 | A | 研修の成果が上記, 生徒のアンケートの数値に現れているため。 | |
| 業務改善による生徒と向きあう時間の確保 | 定時退庁の実施率向上と年休取得の推進 | 勤務時間外在校時間月平均45時間以内の教職員の割合 | 70% | 56% | B | 年間を通しての数値は達成できてないが, 昨年度より4%増加している。また, 前年度の人数を下回ったのは1ヶ月のみであった。 | 管理職 |

中期（3年間）経営目標

（2）総合学科の特色を生かした学びの広汎な展開により，課題発見・解決能力を高める。

| 短期(本年度)経営目標 | 本年度行動計画 | 評価指標 | 目標 | 実績値 | 評価 | 理由 | 担当分掌 |
|-----------------------------|--|---|-------------------------------------|-------------------------------------|----|--|-------|
| ESD・SDGsの視点を取り入れた教育内容づくりの推進 | 「産業社会と人間」ライフプラン策定，「フロンティアⅠ・Ⅱ」の体系的指導 | 意識調査の「身の回りのことや社会の課題の解決策を考えている」の肯定的評価の割合 | 1年 60% 2年 70% 3年 80% | 1年 54% 2年 79% 3年 78% | B | 1年次と3年次がわずかではあるが，目標値を達成できなかったため。 | 教育研究 |
| 特色ある学校設定科目の教育内容の充実 | 「防災」選択者の「防災リーダー」としての育成 | 選択者の校内外での活動回数 | 5回 | 6回 | A | 目標値に達しているため。 | 教務 |
| | 「呉学」「看護基礎」「福祉基礎」「保育実践」「調理2」等における専門機関とも連携した高度な教育内容の提供 | 専門機関等との連携回数 | 15回 | 17回 | A | 目標値に達しているため。 | |
| 生涯学び続ける意識の醸成 | 資格取得の促進 | 合格率 | 80% | 75.5% | B | 目標値の80%に近づいているため。 | 教育研究 |
| | 読書習慣の確立 | 学級内で年間5冊以上読んだ生徒の割合 | 50% | 15% | C | 1年16%，2年11%，3年19%で目標値に達していないため。 | |
| グローバルに活躍する人材の基礎の醸成 | 姉妹校との相互交流によるグローバルマインドの向上 | 姉妹校との相互交流の回数 | 3回 | 5回 | A | 姉妹校である安樂高級中學へ訪問団を派遣した。また，呉市の姉妹都市昌原市に交換学生代表として2名が訪問し交流を深めた。 | 総務企画部 |
| | 異文化理解促進のための交流の場の積極設定 | 異文化理解に繋がる実践の回数 | 3回 | 6回 | A | 安樂高級中學・昌原市訪問生徒による交流活動の報告会を文化祭で行った。10月には，朝鮮通信使再現行列訪問団（京畿国際通商高校）の来校による交流を図った。また，11月に外国語科教諭による国際理解と国際交流についての講演会を実施した。 | 総務企画部 |

| 中期（3年間）経営目標 | | | | | | | |
|---|---------------------------|--|------|-------|----|---|-------|
| （3）生徒の規範意識や社会性を高め、自立した社会人としての資質・能力を身に付けさせる。 | | | | | | | |
| 短期(本年度)経営目標 | 本年度行動計画 | 評価指標 | 目標 | 実績値 | 評価 | 理由 | 担当分掌 |
| 規範意識や社会性を高める | 時間・期限への意識を高める | 1日の遅刻者数 | 1.5人 | 2.61人 | C | 昨年度よりも0.41ポイント上がった。 | 生徒指導 |
| | ルールの意味を考え尊重する意識を高める | 特別な指導の回数（携帯電話によるものを除く） | 10回 | 10回 | B | 昨年度よりは特別な指導の件数は減少したため。 | 生徒指導 |
| | | 生徒の規範意識に対する肯定的評価 | 95% | 99% | A | ほとんどの生徒がルールを守っているという意識を持っている。 | 生徒指導 |
| 生徒支援の体制の拡充 | 教育相談活動を充実させる | 教育相談に対する肯定的評価 | 90% | 93% | A | 教職員との信頼関係が構築されていると考えられる。 | 生徒指導 |
| | 困り感のある生徒への具体的支援 | 困り感のある生徒の現状及び支援計画の全体共有をはかる研修の回数 | 3回 | 3回 | A | 困り感のある生徒は増加の傾向があり、全体研修や学年会と連携して行っており、必要に応じてスクールカウンセラーと連携している。 | |
| 部活動の充実により、活動実績を向上させる | 部活動による学校生活の充実 | 部活動加入率 | 85% | 86% | B | 目標は上回っているが、減少傾向にある。 | 生徒指導 |
| | 適切な目標設定と計画的活動により部活満足度を高める | 中国大会以上の大会等への出場、県大会ベスト8以上への進出、またはそれに準ずる成績を収めた部活動数 | 5団体 | 7団体 | A | 目標を上回った。 | 生徒指導 |
| | | 部活動への取り組みに対する肯定的評価 | 85% | 79% | B | 部活動に参加している生徒の部活動への意識は高い。 | 生徒指導 |
| 貢献の意識の醸成 | ボランティア活動への積極参加と「学び」への連結 | ボランティア活動への延べ参加者数 | 400人 | 851人 | A | 参加者の延べ人数が目標値の2倍を超えている。（3月10日現在） | 総務企画部 |
| | | 自尊・貢献に対する肯定的評価 | 70% | 87.0% | A | 学校評価アンケートから自尊・貢献に関する項目で1年86%、2年89%、3年86%と高い数値となったため。 | 総務企画部 |

【最終評価結果の分析】

＜管理職＞

- スクール・サポート・スタッフの導入により、教職員の印刷・配付・保存等の事務的業務量の削減が図られている。また、自動採点システム「百問繚乱」の導入により、定期考査の採点時間が教科によっては大幅に縮減された。管理職面談等を通して、在校時間が多い教員に意識喚起を図ったことで、在校時間 45 時間以下の教員が前年度より増加した一方で、部活指導時間については、土日や平日の勤務時間外における在校等時間が依然として一部の教員に集中しており、課題が残る。

＜教育研究部＞

- 授業評価アンケートは1回目より2回目の方が、15項目のうち12項目で数値が高くなっている。ファシリテート研修を受けたことにより、各教員が自分の授業デザイン力を高めたことも一因と考えられる。ESD・SDGsの視点については、1年次生が54.1%（前回49.4）、2年次生78.9%（前回80.9）、78.3%（前回79.2）と数値が目標値に達していない。また、読書習慣は、探究活動の基本であるが、目標に達していない。

＜教務部＞

- 昨年度から、定期考査等における「知識・技能」問題の正答率60%以上の生徒を70%以上にする取り組みについての分析を取り入れている。今回の対象は、第1学期中間考査と期末考査、第2学期中間考査と期末考査の計4回である。その全体の達成率の平均は51.1%であり、中間報告時（54.2%）に比べ目標値の70%から少し遠ざかった。
- 特色ある科目において外部との連携を行っており、専門的な知識を習得する機会を多く設定できている。また、今年4年目となる「呉学」は、呉の魅力について伝えるために広島国際大学や月刊くれえばんなど、多方面と連携するような授業を展開しており、さらに全3グループが呉の魅力を伝えるべく、呉の歴史と文化に関するテーマで呉を代表する老舗や企業、行政と連携を取り、取材を行い先日小冊子が完成した。
- 資格取得について、取得をめざし受験した生徒の合格率を基準としており、目標値は達成できなかったが、昨年度と比べ特に情報系の資格取得に向け受験者が増えている。

＜進路指導部＞

- Classiへの学習時間の入力について、月・火曜日で、生徒への声掛け・指導を行っているが、月曜のチェックでは未入力の生徒が多くみられることが課題である。また、平日・休日を合わせた学習時間の平均は、1年41分、2年94分、3年87分で、低学年の学習意識の低さと受験期以降の学習時間の確保に課題がある。
- 1、2年次生の評価指標として、1月実施の「ベネッセ総合学力テスト」を用いた。3科目総合で偏差値50以上の生徒は1年13名、2年4名で、志望校に対する学力向上に向けた各教科・学年の取り組みが必要と考える。
- 希望進路の実現に向け、3年次生の90%以上が年内に行われる入試／就職試験に挑む傾向にある（うち76%が合格・入学／入社手続き済）。年明け入試も含めた国公立大学の合格者数が2名であることが来年度に向けての課題である。

＜生徒指導部＞

- 現時点での遅刻状況は昨年度数値より増加している（2.61人）。基本的な生活習慣に対する規範意識は定着しているが、遅刻に対する意識は低下しており、昨年を大幅に上回った。一方、遅刻傾向の生徒には早朝登校による指導を実施しており、早朝登校による指導の回数は昨年より改善された。遅刻・欠席について始業式等の生徒指導講話で改善を促しているが、遅刻者が2桁となる日もある。
- 現時点で特別な指導対象の事案は10件発生しており、昨年度より件数は減少している。生徒の規範意識に対する肯定的評価は99%を示している。全体的に落ち着いた学校生活が維持されているが、個別に支援を要する場合も増えている。
- 教育相談に対する肯定的評価は、本年度91.7%であった。カウンセリングマインドに対する教職員の共通理解は深まり、教職員間のコミュニケーションも図られ、組織的に取り組まれているケースもある。
- 部活動では上位入賞や上位大会への出場団体数は昨年度より増加するとともに、大きな実績をあげている。部活動加入率は昨年度に比べて微減したが、生徒の部活動に対する肯定的評価は79%と高い。

＜総務企画部＞

- 安樂高級中學や昌原市交換学生事業に派遣された生徒が交流で学んだ内容を、文化祭で全校生徒のみならず保護者にも共有できた。また、京畿国際通商高校の生徒からなら朝鮮通信使再現行列訪問団と音楽をはじめとする文化交流を全校生徒が参加して行い親睦が深まった。
- ボランティア参加生徒の延べ人数が目標を大幅に上回った。様々な場面で生徒の貢献意識を醸成する取り組みを行ったことが、積極的な参加につながったと考える。

【今後の改善方策】

＜管理職＞

- 定時退校日が徹底できるように呼びかけを継続する。部活動は本校の魅力の一つとなっていることから、複数の顧問で分担しあうなどして練習時間を減らすことなく、成果につながられるような部活動を模索していく。ICT推進委員会及び業務改善推進委員会を中心に、DX化による業務改善をさらに推進する。業務改善が「生徒と向きあう時間の確保」につながるように、教職員の目的意識を高める取り組みを今後とも展開する。

＜教育研究部＞

- 教員が各教科・科目の授業内容を「産業社会と人間」や「フロンティアⅠ・Ⅱ」等の探究学習とつなげる意識をさらにもって授業に臨む。また、授業内容が、探究活動のどこに活用できるのかなど、生徒にも意識させる。授業デザインの視点にファシリテートだけでなく、探究活動の充実のための単元設定という視点を取り入れる。授業を通して「付きたい力」を明確にするだけでなく読書を並行して推奨することで、学習内容の確実な理解につなげていく。

＜教務部＞

- 知識・技能の正答率については、生徒の実態をしっかりと把握した上で問題を考えていかなければならない。そのため、小テストや単元テストなど授業内での生徒の理解度の把握に努め、定期考査問題について教科内で吟味し、より多くの生徒に基本的な力を身に付けさせる取り組みをしていく。
- 「呉学」では、昨年度に引き続き呉市の各事業所と連携を取ることができた。また、福祉基礎の授業においては、6事業所と連携することができ、様々な角度から福祉について考えることができた。家庭科の科目についても、多くの事業所と連携できたので、引き続き行っていく。
- 資格取得については、例年と比べ情報関係の受検者が増えている。さらに、Classi や Classroom 等を利用して広報する。また、折に触れて資格の重要性や生涯学習の必要性を生徒に対して啓発していく。

＜進路指導部＞

- 「自律的な学習者」の育成を目指し、今後も粘り強く指導を続ける。Classi の入力や学習アンケート等を通し、進路実現に必要な学習時間の確保について教育相談等で確認・指導を行う取り組みを進める。
- 模試に対する取り組みについて、授業改善や学年の学習意欲の意識付けの材料として、模試分析後の改善策について分析者のコメントを生徒に返す取り組みは今後も続ける。
- 生徒の進路選択・決定が適切におこなわれるよう、今後も細心の注意を払って入試事務を行っていく。全学年とも、生徒・保護者・教職員間の連携を密にし、丁寧で組織的な進路指導を行う。国公立大学進学希望者を増やす取り組みとしては、1・2年次生の学習の質を高めることと同時に、本校の恵まれた教育環境を存分に活用した実績作りを機会があるごとに生徒に勧めていく。

＜生徒指導部＞

- 目標値である1日1.5人以下の遅刻指導を継続していく。全体の遅刻者が2桁になる日もあり、欠席、遅刻早退をしないという意識付けを節目の講話等で行っていくと同時に、遅刻者への生活改善に取り組む指導を新たに行っていく。保護者との確実な連携や学年や分掌との速やかな連携等を徹底する。遅刻をしない生徒に視点を当てた指標を考える必要がある。
- 全教職員が生徒指導規程の共通理解のもと、情報共有を心掛け、多面的な生徒理解を図ることにより、組織的かつ継続的に生徒指導に取り組み、問題行動の未然防止に努める。そのため、共感的人間関係を基盤とした生徒への声かけを行ったり、生徒指導に係る研修会を計画的に実施したりすることで、教職員個々の指導力の向上を図る。
- 計画的な部活動運営に対する共通理解を図るとともに、生徒の部活動に対する肯定的評価を更に高める。また、各種大会以外でも部活動に対する充実感を得られる取り組みを設定していく。

<総務企画部>

- 本年度行った事業を継続して執り行うことで生徒の国際交流の意欲を高めると同時に、諸外国の方と接する経験値を増やし物おじしない姿勢や言動につなげていきたい。
- ボランティア活動に参加する生徒は、1・3年次生に参加者が多いのに対して、2年次生の参加人数が低くなっている。ボランティア活動に対する全校的な関心・意欲のいっそうの高まりを目指したい。

別紙:現状分析

| | | | | |
|------|---|---|------|---|
| 外部環境 | <p>O (支援的要因)</p> <p>①小・中学校, 高等専門学校, 大学等が隣接している。 ②PTAが学校に協力的である。 ③市呉の存在が市民から注目されている。 ④市内の各団体から支援を期待できる。</p> | <p>S (強み)</p> <p>①総合学科の特性を生かし, 多様な選択科目を設定している。 ②挨拶, マナー, 時間厳守, 服装等の生活規律が徹底している。 ③地域・社会に貢献しようとする意欲が旺盛な生徒が多い。 ④部活動が活発で, 多くの部が上位大会進出を果たしている。 ⑤教育相談体制が整備されている。 ⑥本校への進学希望者が多く, 中学生からの支持を得られている。 ⑦「産業社会と人間」から「フロンティアⅠ・Ⅱ」に至る一連の取り組みが進路実現に有効である。</p> | 内部環境 | <p>「支援的要因と強みを生かす」</p> <p>○近隣の教育資源等の活用を促進する。 ○PTAと連携し, 協働して教育内容を創造する。 ○総合学科の特性とESDの研究指定の成果を生かして, 身に付けさせたい9つの資質・能力の育成を図ることにより, 生徒の進路実現につなげる。 ○生徒の学力の向上, 規範意識や社会性, 奉仕の精神を涵養する指導を充実し, 市民等から誇りに思われる生徒を育成する。 ○部活動の充実により, 自己肯定感を高めつつ, 活動実績へとつなげていく。</p> |
| | <p>T (阻害的要因)</p> <p>①県立学校教員との人事交流が少なく, 教職員の年齢構成の偏りが解消されない。 ②情報不足や入手の遅れ等のため県立学校と帯同した動きが困難な場合がある。 ③生徒の多様な進路目標に対する対応力を高め切れていない。</p> | <p>W (弱み)</p> <p>①高い目標を実現しようという意欲や態度を十分には育成できていない。 ②一般入試で求められるレベルまで基礎学力を高め切れていない。 ③家庭学習時間が少ない。 ④多様な選択科目の開設に必要な選択教室や実験・実習室等が不足している。</p> | | <p>「阻害的要因と弱みを克服」</p> <p>○校内授業研究を充実するとともに他校の公開研究授業等に積極的に参加する体制を整える。 ○ESD・SDGsの視点を取り入れ「産業社会と人間」「フロンティアⅠ・Ⅱ」の系統性を高め, 学際的な深い学びを実現する。 ○個別指導の徹底とその支援体制を構築し, 進路実現につなげる。 ○学校の方針や情報等を積極的に発信する。 ○様々な機会を捉えて生徒・保護者に進路情報を提供し, 低学年次から段階的に進路意識を高める。</p> |

1 生徒の高い志や夢を実現する。

○総合学科としての特色を生かした教育活動の充実を図る。

- ・キャリア教育を柱に, 生徒一人一人が自立した社会人・職業人として将来を展望し, その実現のために必要な教科・科目を適切に選択できるよう, 教育課程を編成・実施する。
- ・地域社会の担い手としての素養を高め, 持続的発展が可能な社会の構築のために行動できる人材を育成する。その実現に向けて教育活動の体系化・構造化を図り, 「地域課題解決型キャリア教育」のカリキュラム開発と実践を行う。

○希望する進路を確実に実現できる学力を身に付けさせる。

- ・「広島版『学びの変革』アクション・プラン」に基づき, 主体的・能動的で学習者基点の深い学びを促進する授業づくりを行う。
- ・発問の工夫, ICT機器の活用, ESD・SDGsの視点を取り入れた授業改善を推進し, 生徒に自律的学習者としての意欲と態度を身に付けさせる。

○教科学習や部活動の成果として, 各種大会・コンクール, 資格取得等で全国レベルの実績をあげる。

2 地域の誇りとなり得る高校となる。

○生徒指導を徹底し, 自立した社会人としての規範意識や社会性を涵養する。

- ・全教職員で生徒指導規程の共通理解を図り, 統一的な指導を行う。
- ・学校生活において生徒指導の三機能を生かした指導を行う。

○ボランティア活動のさらなる充実を図り, 貢献の意識を醸成するとともに「学び」との連結を図る。

○学校情報を積極的に発信し, 保護者や地域の期待に応えるとともに, 本校の教育力を生かして, 小・中学校教育の充実・発展に寄与する。

○不祥事を許さない組織風土を醸成するとともに, 教育活動のあらゆる場面において, 生徒・保護者・地域から信頼される教職員の姿を示す。